

《學界展望》

中世ヨーロッパ世界の統一と分化

渡 邊 金 一

一 中世ヨーロッパ世界の統一性とその内容

- 二 中世ヨーロッパ世界の分化の發端とその展開
1. 十字軍以前(a・bまで本號、以下次號)
2. 十字軍以降

一 中世ヨーロッパ世界の統一性と

その内容

わたくしたちが歴史的對象にたいしてとる距離やそれをなめるさいの視角は、そもそもその對象にふさわしいものでなければならぬ。もしそうでないならばわたくしたちの歴史認識は、A. J. Toynbee が指摘しているような、たとえば一國の歴史を、それを部分としてふく

むより高次の關連を無視して神聖視しようとするあのヴィクトリア王朝時代式の *parochial* な見方に隨してしまふであらう。ところで最近におけるビザンツ研究の進展は、ごく最近まで何人たりともうたがいをもたなかったヨーロッパ中世世界像というものが、實は西方のみに偏した *latino-zeutisch* な歴史觀であつたこと、キリスト教によつて特色づけられた共通の文化をもつヨーロッパ中世 *die christliche Oikumene* ⁽¹⁾ はビザンツをも不可缺の一環とするところの “un intelligible field of study” をそれ自體のうちにかたちづけていたこと、したがつて西ヨーロッパ内部の歴史現象を理解するためにも、ビザンツへの顧慮なしですますことはもはや出来ないこ

と、これらの點を、歴史生活のすべての領域にわたって、具體的な個々の研究成果をもって明かにしたのである。⁽²⁾

最終的には Leopold von Ranke によって定式化されるにいたったところの、民族移動以降のローマン的・ゲルマン的諸民族の統一性という考え。中世ヨーロッパ史を構成するものとして古代、ゲルマン、キリスト教の三つをあげる考え。このような、近代ヨーロッパ人が自身自身にかんしてつくりあげていた歴史像というものに根本的な疑問を提出したという意味でビザンツ研究の最近の業績は、歴史研究の他の領域でなされた新史料の發見や新研究の成立にすくなくともおとらないだけの重要性をこんご Historiography のなかで自己に要求しつづけるであらう。

ビザンツと西ヨーロッパとが、共通の文化遺産を繼承し、しかもそれぞれの發展において相互に影響をあたえあうものとして、中世ヨーロッパという統一的世界をかたちづくっていたこと、この統一性の問題をそれとして取上げるのがたとえば D. A. Zakynthos であるが、⁽³⁾ 精神・物質文化の個々の領域についてこの點を指摘するいくつかの考察や指摘がある。

西方の教父の神學がオリゲネスからアレクサンドレイアのキュロスにいたるギリシア教父の偉大な業績の上にきずかれていったことは周知の事實であるが、五・六世紀の西方の精神生活にあたえたギリシア教父の著作の影響を論じたものとしては P. Courcelle の大著を、これら著作のラテン語譯を含む問題については B. Altaner の考察を、ギリシア語でかかれた神學および聖者傳のラテン譯が當時の西ヨーロッパでどのような藏書事情にあったかについては A. Siegmund の論文をあげることが⁽⁴⁾ できる(ここにしめされた當時の言語事情については後述)。

またビザンツ哲學の研究については、B. Tatakis が最初の總合敘述を試みたにすぎない研究段階であるけれども、たとえばビザンツの神祕主義思想家 Ps.-Dionysios Areopagites が西ヨーロッパのスコラ學發展の端緒をなしたという意義はすでに確定すみの事實なのである。⁽⁵⁾

ビザンツが年代記とは區別された意味での歴史敘述を、しかもそのほとんど全時代にわたってもっており、この點で同時代の西ヨーロッパにくらべてはるかにぬきんでていたこと(cf. Ostrogorsky, *Gesch. des byz. Staates*, S. 21) また年代記については Malalas や Theophanes

(Bibliothecarius Anastasiusを通じて)の作品が西ヨーロッパ中世にとって手本となったこと (cf. K. Krumbacher, *Gesch. der byz. Literatur* S. 328, 344)。このような事情にかんがみ、これら兩世界の歴史・年代記敘述の比較研究は豊かな實りを約束するものであらう。おなじことは聖者傳についても言いいうると思う。

思想の世界から藝術の世界に眼を轉じ、J. Strzygowskiによって波紋が投ぜられた美術工藝におけるビザンツの西ヨーロッパへの影響の問題をとり上げてみるならば、この點にかんする數多くの個別的研究所を別として、わたしたちは總合的敘述を J. Ebersolt, *Orient et Occident* およびそのドイツ的照應である G. Soyler の書物のなかにみいだす。しかしながら他のいかなる藝術領域にもまして研究が急速な進歩をみせているのはビザンツ音樂の領域であり、このような理解のふかまりにつれて初期中世におけるビザンツと西ヨーロッパとの密接な關係が明かにされてきた。ローマその他の西方教會でうたわれたギリシア・ラテン語の典禮用聖歌を基礎に、これら兩語のテキストを比較するのみならずギリシア旋律の構造とグレゴリオ聖歌のそれとを比較し、ギリシア語テクス

トとは西方教會のギリシア人・シリア人メンバーのためなされたラテン語テキストからの翻譯にはかならず、これに付された旋律もラテン旋律にすぎないという假説を打破して、兩者間の旋律構造上の一致性を共通のシリア起原に遡らせた E. Wellesz の問題作がそれである。

では以上のような文化交流にさいして手段の役割をはたした言語についてはどうか。一般的に、兩世界の言語上の理解は薄らいだとはいいえなくても、ラテン世界におけるギリシア語の知識は、質の點ではともかくとして(後述)すくなくとも量的には相當の規模のものであったことについて、A. Michel および B. Bischoff がたんなんな實證をおこなっている。

またこの A. Michel が聖地へのないしローマの使徒墓地への巡禮、ボスフォロスおよびローマでの交互の修道院建設、をとり上げ、G. Schneider が西方におけるギリシア聖者崇拜をとりあげるなど、教會關係での東西間の多面的な交渉の事實も明確化されている。

このようにのべてくると、アラビア人の地中海への進出が東西間の通商關係をも阻害したという H. Pirenne 説に聞き慣れている讀者は奇異に感ぜられるかもしれない

い。然り！この點にかんする Pirenne への疑問もはかならぬ最近のビザンツ研究が提出するところなのである。たとえばさきの E. Wellesz の著にたいする書評で H. G. Beck がふれているように⁽¹³⁾、Pirenne の所説とは反對にほかならぬ八世紀において、シリア、パレスティナからイタリヤへのギリシア人移民がおこり、その結果としてローマではギリシア人から成る *scholae cantorum* の活躍がみられる^(13a)。また F. Dölger は諸種の史料、なかんずく八世紀の聖者傳がしめすギリシア——南イタリヤ・シシリア間の通商關係の存續を指摘し⁽¹⁴⁾、さらにはビザンツ人の言葉のなかにはイタリヤ語、アラビア語、トルコ語からの借用語が多いこと、しかもこれら借用語中には家財、食料、衣料にたいする名稱など、總じて下層民の低い文化に所屬することはがみられること⁽¹⁵⁾、をもつて、東西間の途切れない交渉の證左とするのである。ビザンツと西ヨーロッパはこのように事實上の交渉關係をもったにとどまらず、經濟構造のあり方の點でも、いくつもの類似性をもっている。わたくしたちはまず商業組織をとり上げてみよう。すでに G. Mickwitz は、コンスタンティノープルの *Zünfte* 關係の法令を集めた十

世紀所屬の “*eparchikon biblion*” にするといふ分析のメスをあて、ここにあらわれたビザンツのツンフトが經濟的な「ツンフト」概念から一步も外れていない旨の指摘をめぐり、*“eparchikon biblion”* の “*Leiturgie*” 原則を強調する A. Stöckle, *Spätromische und byzantinische Zünfte*. (Klio Beih. 9) Leipzig 1911. X 180 S. とは反對に同時代の西ヨーロッパのツンフトと *Parallelismus* を確定づけた (G. Mickwitz, *Die Kartellfunktionen der Zünfte und ihre Bedeutung bei der Entstehung des Zunftwesens. Eine Studie in spätantiker und mittelalterlicher Wirtschaftsgeschichte*. (Societas Scientiarum Fennica. Commentationes Humanarum Litterarum. VIII. 3.) Helsingfors 1936. 250 S.)。その後同史料にたいする研究は M. Ja. Sjuzjumov, E. B. Neida とともにたたき、*To éparhikou βιβλίον Νεω-τος τοῦ Σοφοῦ καὶ αὐτοεξηλατὸς Βούλγαρις*, Athen 1935 の著者 A. Christophilopoulos の再論をおこなふ E. E. Lipšic、またこの問題にふれている。ビザンツ都市をそれとして扱ったものとして從來 L. Brehier の概説書中での敘述をもつにすぎなかったた

くしたちにふつ (*Le Monde byzantin*. II. *Les institutions de l'empire byzantin* (1949) 186—217, III. *La civilisation byzantine* (1950) 77—148.)、前述(註¹⁷)の E. E. Lipsic の論文のほか、A. P. Kazdan, M. Ja. Sjuzjumov, P. A. Nasledova などソヴィエト歴史學界からの貢獻は貴重であるが、わたしたちの視点から問題となるのはむしろ、從來西ヨーロッパに局限されていた中世都市研究の視野を、ビザンツ、イスラムにまでひろげた Cl. Cahen の問題作だと思う。⁽¹⁸⁾ この作品のもつ劃期的意義についてはすでに註(1)の拙稿でとりあげたのでここでは繰返さない。ただ Cl. Cahen により西ヨーロッパの *Bruderschaft*、イスラムの *ḥiṣṣān-ʿayyārūn* (イラン) および *abdat* (シリヤ) に相當する存在とされたビザンツの *demos* については、F. Dölger, A. M. Schneider, *Byzanz*. 108—109 にかかげられた文獻のうち *demos* の社會的性格を追求するソヴィエト歴史學者 A. P. Diakonov および M. V. Levčenko の敘述には、あらたに N. V. Pigulevskaia, M. J. Sjuzjumov の論文がくわわったことを記すにとどめておこう。⁽¹⁹⁾ このような初期、中世の都市研究のほか、ビザンツ後期の都市

がふくむ興味ある問題は E. Francès によつて指摘されるにふつた。この時代のビザンツ都市が、四周の農村に *Grundherrschaften* を所有する *Feudalherren* の居住地という性格をもつた點の Francès の確認により、わたしたちはそれが Max Weber のいわゆる *antik-italinisch* な存在 (Max Weber, *Agrarverhältnisse im Altertum*, in *Gesammelte Aufsätze zur soz. u. wirtsch. Gesch.* (japanische Übersetzung von K. Watanabe, T. Yuge 渡邊・弓削共譯「古代社會經濟史」1958, Tokyo) 255 ff.) であることを知るにふつたわけだ、ともかくも同時代の西ヨーロッパ都市との比較論への手掛りが得られたというべきであらう。⁽²⁰⁾ さらに今秋 München で開催された第十一回國際ビザンツ學會は社會學・地理學部門の共通テーマ “Die byzantinische Stadt” をめぐつて興味ある論争をたたかわしただけだと思ふ。

わたしたちはさういふにビザンツ農村の社會構成に眼をむけてみよう。この點にかんするソヴィエト歴史學界の動きについては稿を改めて論ずるごとく、*Grundherrschaft* を基盤とし、西ヨーロッパに典型的な形態で完成をみたような *Feudalismus* が、ビザンツに求め

られるべきか否かの問題については、これを肯定する A. A. Vasiliev 以下 D. A. Zakynthos は批判をおこない、ビザンツでは完成した Feudalismus は十四世紀にならなければ出現しないことを説いたが、⁽²¹⁾ 今度はその Zakynthos がビザンツの Lehenwesen と西ヨーロッパのそれとの類似を強調しすぎるとして、Feudalismus はもつとビザンツ國家概念に無縁のものであること、それは、Grundherrschaft 的基盤のもと十二世紀にはじめて十字軍が西ヨーロッパからもちこんだ考え方の影響のもとに成立をみたこと、⁽²²⁾ をとく F. Dölger の批判をうける始末である。しかしながらビザンツにおいて Grundherrschaft なり Feudalismus なりは、むしろわたくしたちがその在り方や成立の時期の點を不問に附すなら、⁽²³⁾ F. Dölger や G. Ostrogorskiy の敘述もしめしているように、たしかに存在したのである。⁽²⁴⁾

以上にのべたような中世ヨーロッパ世界の統一性の認識の上にたつことよって、わたくしたちはかえって、それにもかかわらずみとめざるをえないところのビザンツと西ヨーロッパとのそれぞれのこととなった歩みを、その獨、自、性において把えることができるのである。そして

それを跡づけるのが本稿のつづいての仕事となる。(一九五八・九・四)

(1) このように擴大された意味でのヨーロッパ世界には、⁽¹⁾ らない、中世オリエント世界への顧慮が、ビザンツないしヨーロッパ中世一般の理解にとつて、⁽²⁾ いかにも重要であるかについては、本稿と平行して執筆中の拙稿「ビザンツと中世オリエント世界」(mein Aufsatz, *Byzanz und der mittelalterliche Orient — Forschungsbericht —*) 日本オリエント學會月報 (Bulletin of the Society for Near Eastern Studies in Japan) No. 12 を参照せよ。

(2) 以下の敘述にとつて私に導きの星となつてくれるのは、⁽³⁾ 1938—1950 までの研究報告 F. Dölger, A. M. Schneider, *Byzanz*, [Wissenschaftliche Forschungsberichte, Geisteswissenschaftliche Reihe.] Bern, A. Francke 1952. 328 S. 及び 1950 年號の Byzantinische Zeitschrift (B. Z. 年報記) による。⁽⁴⁾ 以下は、ヨーロッパの關係についての研究報告によつて、F. Dölger, *Byzanz und das Abendland vor den Kreuzzügen*, (mit Ausnahme von Wirtschaft, Handel, Verkehr und Kunst) für den X. Internationalen Historikerkongress in Rom. Sept. 1955. Relazioni (per il) X Congresso Internazionale di Scienze Storie, Roma 4—11 sett. 1955. Vol. III: Storia del Medioevo (Firenze, Sansoni 1955) 67—111. を参照 (cf. B. Z. 48 [1955]). ⁽⁵⁾ 以下の

告を、舊來の中世ヨーロッパ觀を一新せんとする同會の
りとの報告と稱す。F. Vercauteren, *Rapport
général sur les travaux d'histoire du Moyen Age de 1945
à 1954*. Raiazioni (per il) X Congresso Internazionale
di Scienze Storiche, Vol. I: Relazioni generali e sup-
plementi (Firenze, Sansoni 1955) 41—165. (cf. B. Z. 48
(1955) 462—3.)

(7) D. A. Zakynthos, *Byzanz und die europäische
Einheit im Mittelalter*. Internationales Jahrbuch 4
(Branschweig 1955) 5—21. cf. B. Z. 49 (1956) 407—
408. 又 G. Fiocco, *Oriente e Occidente*. Atti Istitt.
Veneto Sci. Lett. ed Arti, Cl. Sc. Mor. e Lett. 112
(1952—1953) 359—369. —G. Schreiber, *Christlicher
Orient und mittelalterliches Abendland. Verbindungslinien
und Forschungsaufgaben*. Oriens Christ. IV, 2 (=38)
(1954) 96—112 (zur Forts.) 61—70. 又 62 (cf. B. Z.
48 [1955] 277). 又 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 B. Z. III.

Abteilung H. Byzantinische Frage 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

(8) P. Courcelle, *Les lettres grecques en Occident. De
Macrobe à Cassiodore*. [Bibliothèque des Écoles Fran-
çaises d'Athènes et de Rome, 159.] Paris, de Boccard
1948. XVI, 440. éd. nouv. — B. Altaner, *Beiträge zur
Geschichte der lateinischen Übersetzungen von Väter-
schriften* (*Basilus d. Gr. und Johannes Chrysostomos*),
«Histor. Jahrbuch d. Görresges.» 61 (1941) 208—206.

A. Siegmund, *Die Überlieferung der griechischen christ-
lichen Literatur in der lateinischen Kirche bis zum
12. Jhd.* [Abhandl. d. Bayer. Benediktiner-Akademie,
5] [=Veröffentlichung des Byzantinischen Instituts
Scheuern] München-Pasing, Filser-Verlag 1949. 4Bl.,
308 S. 又 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

(9) B. Tatakis, *La philosophie byzantine* [E. Bréhier,
Histoire de la philosophie, fasc. suppl. n. 2.] Paris,
Presses Univ. de France 1949. VII, 324 S. Ps.-Dionysios
44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

(10) F. Dölger B. Z. 51 [1958] 159—60 (Anna-Dorothee
v. den Bincken, *Studien zur lateinischen Weltchronik
bis in das Zeitalter Ottos von Freising*. (Dissert.
Münster.) Düsseldorf, Michael Triltsch 1957. 249 S.,
6 Tabellentaf. 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218

schmelle Aufsätze zur Geschichte der byzantinisch-orientalischen Beziehungen und des Kaiserthums. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1958. VIII+573 S. Mit IV Taf. 2の言及 (S. 7) を参照。なお最近 J. Ebersolt, の書物の第二版が第一版とかわらなうまじ出版された。J. Ebersolt, *Orient et Occident. Recherches sur les influences byzantines et orientales en France avant et pendant les croisades*. Deuxième édition. Paris, E. de Boccard 1954. 146 S. 1 Bl., XLII Taf., 10 Abb. im Text. (cf. F. Döger in B. Z. 48 [1955] 180)

(oo) 黎文煥著、ハビツ・E. Wellesz, *A History of Byzantine Music and Hymnography*, Oxford Clarendon Press 1948. IV, 358 S., 6 Taf. — O. Tiby, *La musica bizantina. Teoria e storia*. Milano, Bocca 1938. VII, 213 S., 8 Taf. — L. Tardo, *L'antica melurgia bizantina nell'interpretazione della Scuola monastica di Grotteferrate*. Roma, Collezione Meridionale Editrice 1938. XXI, 402 S. ㄱㄹㄴㄷㄸㄹ ㄱ' Ferrari, *Byzantina musica*. Enciel. Catoll. II (1949) 1704—1709 & Maria Stöhr, *Byzantinische Musik*. Musik im Geschichte und Gegenwart 2 (1951/2) 577—596 ㄱㅅㅇㄴㄷ 韓契의 項目과 ㄱㅇㅇㄴ 研究情况 ㄱ의 辭句와 ㄱㅇㅇㄴ의 註釋을 참조하여 H. J. W. Tilleyard, *Gegenwärtiger Stand der byzantinischen Musikkforschung*. Die Musikgeschichte 7 (1954) 142—149—C. del Grande, *La musica bizantina degli inizi al secolo VII*.

Corisi di cultura ravennate e biz. (31.3—13.4 1957) fasc. 2. S. 57—62.—R. Schiöterer, *Aufgaben und Probleme bei der Erforschung der byzantinischen Musiktheorie*. Actes X Congrès Intern. d'Et. Byz. (1955) (Istanbul 1957) 278—289. その題を以てハシ neuma の記法を考へる。後述の記法にハシを以て P. Palikarova Verdeli B. Z. 46 [1953] 378—379 の書名を以て (E. Koschmieder, *Die ältesten Nongoroder Hymnologen-Fragmente*, I, [Abhandlungen der Bayer. Akademie d. Wiss., Philos.—Hist. Kl., N. F. H. 35.] München, Bay. Akad. d. Wiss. 1952. 317 S. の巻頭)。

(c) E. Wellesz. *Eastern Elements in Western Chant. Studies in early history of ecclesiastical music.* [Monumenta Musicae Byzantinae, Subsidia, Vol. I=n. 1 American Series.] Boston USA, Byzantine Institute 1947. XVI, 213S., 11 Taf. u. Zahlr. Notenbeispiele im Text.—Id., *Epilogomena zu den „Eastern Elements in Western Chant“*. Die Musikforschung 5 (1952) 131—137. cf. H.-G. Beck in B. Z. 48 [1955] 384—387. 上の劃期的研究を、中世ヨーロッパの教會音樂へのバイザンチンを輕視する舊態依然たる O. Ursprung, *Um die Frage der Echtheit der Missa graeca*. Die Musikforschung 6 (1953) 289—296 と對比してや (cf. B. Z. 47 [1954] 207)。なお今秋 München で行なわれた第十一回國際バイザンチン學會では、音樂史部門が共通テーマ「Byzanti-

nisches in der karolingischen Musik” をとりあげた。

- (9) A. Michel, *Sprache und Schisma*. Festschrift M. Faulhaber (München 1949) 37—69. (cf. B. Z. 43 [1950] 83)—B. Bischoff, *Das griechische Element in der abendländischen Bildung des Mittelalters*, (cf. B. Z. 44 [1951] 27—55). *石田 孝 Steinacker, *Die römische Kirche und die griechischen Sprachkenntnisse des Frühmittelalters*. MiÖG 62 (1954), 28—66. *藤原 隆平.
- (10) A. Michel, *Der kirchliche Wechselverkehr zwischen West und Ost vor dem verschärfen Schisma des Kerkularios (1054)* Ostkirchl. Stud. 1 (1952) 145—173. (cf. B. Z. 46 [1953] 244)——Id., *Die griechischen Klosterseidelungen zu Rom bis zur Mitte des 11. Jhdts*, a. a. O. 1 (1942/53) 32—45.
- (11) G. Schreiber, *Byzantinisches und abendländisches Hospital. Zur Spitalordnung des Pantokrator und zur byzantinischen Medizin*, in: G. Schreiber, *Gemeinschaften des Mittelalters*=Gesammelte Abhandlungen I (Münster, Regensburg 1948) 8—80. *石田 孝 Steinacker, B. Z. 42 [1943/44] 116—149 *石田 孝 Steinacker, cf. F. Dölgert, *Byzanz u. die europ. Staatenwelt*. S. 358.
- (12) H.-G. Beck in B. Z. 48 [1955] 384—5
- (13) 其 郭 G. Schreiber, *Leontinische Wanderungen zum Westen*. B. Z. 44 (1951) 517—523 参照。 *石田 孝 Steinacker, B. Z. 44 (1951) 517—523 参照。 *石田 孝 Steinacker, B. Z. 44 (1951) 517—523 参照。 *石田 孝 Steinacker, B. Z. 44 (1951) 517—523 参照。

Byzanz und Abendland im 9. u. 10. Jhdt. in *Abendland und Byzanz*, S. 198 参照。

- (7) F. Dögger, *Byzanz und die europ. Staatenwelt*. 364
 (2) F. Dögger in B. Z. 45. [1952] 70 (Bespr. von D.
 A. Zakynthos. Βυζάντιον: Κόσμος και κοινωνία. Το-
 ραὶ ἐντοκόρως. Athen, Ikaros 1951. 166 S., 2 Bl. Mit
 6 Taf. u. 15 Textabb.) ㄴㄹㄷㄸㄱㄲㄳㄴㄻㄼㄾㄿ
 ㄰ㄱㄲㄳㄴㄻㄼㄾㄿ R. S. Lopez, *East and West in the early
 middle ages. Economic relations. Relazioni* (per il) X
 Congresso Internazionale di Scienze Storiche, Roma
 4—11 sett. 1955 (Firenze, sasoni 1955), Vol. III: Storia
 del Medioevo (Firenze 1955) 113—163. (cf. B. Z. 48
 [1955] 481—82.) —F. Dögger in B. Z. 48 [1955] 300
 (Bespr. von E. Eickhoff, *Seekrieg und Seepolitik
 zwischen Islam und Abendland bis zum Aufsteige Pruss
 und Genuas (650—1040)*. Mechanisch vertiefte
 Dissertation Saarbrücken. [Schriften der Universität
 des Saarlandes.] Saarbrücken 1953. 2 Bl., V, 292 S.
 Mit 1 Zeichnung u. 3 Karten.)
 ㄱㄲㄳㄴㄻㄼㄾㄿ A. Riising, *The fate of Henri Pirenne's theses
 on the consequences of the Islamic expansion*. Classica
 et Mediaevalia 13 (1952) 87—130. ㄱㄲ H. Pirenne ㄱㄲ
 ㄱㄲㄳㄴㄻㄼㄾㄿ의 現況を知るための必讀の文獻? H.
 Pirenne.—These ㄱㄲ事實反證がなへてゐないㄱㄲㄵㄶㄷㄸ
 論議がなへてゐないㄱㄲこの殘りの問題を指摘し、オリエント

關係の史料の利用の必要をとき、イスラム世界はむしろモ
サント東方とともに西ヨーロッパにたゞし経済的・文化的
統一體をかたちづくるべきことを強調する。女史のこの
最後の主張は奇しむべきと據 S. Lopez の意見より一致する
(cf. B. Z. 47 [1954] 477)。

(2) M. Ja. Sjuzumov, *Das Buch des Eparchen* (russ.).
Učenyje Zapiski d. Staatlichen Pädagog. Instituts von
Sverdlovsk 6 (1946) 115.—E. B. Nejade, *Древнерус-
ская литература в Константинополе карата 10-11 вв.* „*Византизм*“,
Исторический вестник 1947, 1—2. —A. Christophilopoulos,
Συζητήματα περὶ τῆς ἐκ τῶν ἑσχατιῶν Βυζαντίου „Εὐλαγιστά“
11 (1939) 125—136.—E. E. Lipšic, *Zur Frage von*
der Stadt im 8. und 9. Jhd. (russ.) Viz. Vremenn. 6
(1943) 113—131.

その“eparchikon biblion”の成立問題については、
その本質をめぐって把握すべきである。G. J.
Bratliann, *Le commerce bulgare dans l'Empire byzantin*
et le monopole de l'empereur Léon VI à Thessalonique.
Sbornik P. Nikov (Sofia 1939) 30—36.—R. S. Lopez,
La crise du besat au Xe siècle et la date du Livre du
Préfet. Mélanges H. Grégoire II (1950)
403—418.

また“eparchikon biblion”の成立とそれを生産關係
の本質をめぐって把握すべきである。この現代の歴史
學界で當然あるべき問題については、

またそれを奴隸制とすべきである。M. J. Sjuzumov, *Mé-
tiers et commerce à Constantinople au début du Xe siècle*.
(russ.) Viz. Vremenn. 4 (1951) 11—41. —J. 西ロー
マの中央集権の Meister-Geselle 關係を基本とするもの
を、その本質をめぐって A. P. Každan, *Les corporations et*
*ateliers gouvernementaux de Constantinople aux IXe—
Xe siècles*. (russ.) Viz. Vremenn. 6 (1953) 132—155
その成立と發展をめぐって (cf. B. Z. 47 [1954]
241)。

(3) A. P. Každan, *Byzantinische Städte vom 7.—11.
Jhd.* (russ.) Sowj. Archeologija 21 (1954) 168—188.
—Id., *Die soziale Zusammensetzung der Bevölkerung*
der byzantinischen Städte im 9.—10. Jhd. (russ.) Viz.
Vremenn. 8 (1956) 85—96.—M. Ja. Sjuzumov, *Die*
Rolle der Städte-Importen in der Geschichte von Byzanz.
(russ.) Viz. Vremenn. 8 (1956) 26—41. (cf. B. Z. 49
[1956] 503)—Id., *Wirtschaftliche Lage der Vororte*
der byzantinischen Grossstädte. (russ.) Viz. Vremenn.
11 (1956) 55—81.—P. A. Nasledova, *Handwerk und*
Handel in Thessalonike am Ende des 9. und Anfang
*des 10. Jhdts. nach dem Zeugnis des Johannes Kame-
niades*. (russ.) Viz. Vremenn. 8 (1956) 61—84.

(4) Cl. Cahen, *Zur Geschichte der städtischen Gesell-
schaft im islamischen Orient des Mittelalters, Saeculum*
IX (1958) 59—76.

- (27) A. P. Djakonoŭ, *Die byzantinischen Demei und Parteien (τὰ μέγαρα) im 5. bis 7. Jhd.* (russ.), Viz. Sbornik d. Akad. d. Wiss. d. SSSR, Histor. Institut (Moskau 1945) 144—227.—M. V. Leventko, *Die Blauen und die Grünen in Byzanz im 5. und 6. Jhd.* (russ.) Viz. Vremenn. 1 (26) (1947) 164—183.—N. V. Pigulevskaja, *Zur Frage der Kämpfe der Demei in frühbyzantinischer Zeit*. (russ.) Viz. Vremenn. 5 (1952) 216—222.—M. Ja. Sizjannov, *Der politische Kampf und die Schauspiele im römischen Reich des 4. Jhds.* (russ.) Učienye Zapiski d. Universität von Ural 11 (1952) 84—134.
- (28) E. Francès, *La féodalité et les viles byzantines au XIII^e et au XIV^e siècles*. Byzantinoslavica 16 (1955) 76—96. (cf. B. Z. 48 (1955) 481.) 中世の封建的都市とビザンチン帝政の発展 R. S. Lepoz, *La città dell' Europa post carolingia. Il commercio dell' Europa postcarolingia*. Settimane di Studio del Centro Italiano di Studi sull' Alto Medio Evo, II: I Problemi comuni dell' Europa post-carolingia (Spoleto 6—13 aprile 1954). Spoleto 1955. 55S.
- (29) A. A. Vasilev, Byzantion VIII (1933) 584—604 = *History of the Byzantine Empire*. 2nd ed. (1952) 536—579 (*Byzantine Feudalism*). —D. A. Zakynthos, *Processus de féodalisation. L'Hellénisme Contemporain* 1948, S. 499—534. cf. B. Z. 43 [1950] 153.
- (30) D. A. Zakynthos, *Bußarov. Krátes kai konopia. Torgovyj étraktonas*. Athen, Ikaros 1951. 166S., 2 Bl. Mit 6 Taf. u. 15. Textaff. 2 2 2 2 2 F. Dölgert in B. Z. 45 [1952] 70—71. 中世の Bizantinos の 封建的化 F. Dölgert in B. Z. 49 (1956) 407—408.
- (31) 拙稿「ビザンチン帝國における土地所有の問題」『権論叢書第三大卷第三號』、『同誌第三二卷第三號(mein Aufsatz: Probleme der grundherchaftlichen Entwicklung im byzantinischen Reich. I. Eine Analyse der betreffenden Stellen im Cod. Theod. The Hitotsubashi Review. Tokyo 1956 Aug. 41—58. II. Eine Analyse der spätbyzantinischen Praktika. ibid. 1957 Sept. 51—72) 參照。
- (32) F. Dölgert, *Die Frage des Grundeigentums in Byzanz. Byzanz und die europäische Staatenwelt* (1953) 217—231. —G. Ostrogorski, *Pour l'histoire de la féodalité byzantine*. Traduction française de H. Grégoire, publiée avec la collaboration de P. Lemerle. [Corpus Bruxellense Historiae Byzantinae, Subsidia 1.] Bruxelles, Editions de l'Institut de Philologie et d'Histoire Orientales et Slaves 1954. XVI, 388S. (中世東洋史學大會論文集中の我が國の封建問題 meine Besprechung in Historical Journal of Japan 1956 June 參照)

二 中世ヨーロッパ世界の分化の發端とその展開

1 十字軍以前

以上わたくしたちは、歴史生活のいくつかの領域における最近のビザンツ研究のごく主要な業績若干をかえりみ、中世ヨーロッパ世界の正しい理解のためには、その統一性の事實、つまり、ビザンツと西ヨーロッパとが繼承した文化遺産の共通性、これら兩部分が相互のあいだにとりむすんでいた多面的な交渉、をなによりも、まず心に留めておかなければならないという點にたつした。しかしだからといって中世ヨーロッパ世界を、まったく一様の文化なり社會構造なりをもった世界だというふうにかんがえるとするならば——そして事實 F. Dölger の指摘によれば、最近の研究動向にはこのような危険がはらまれている⁽²⁵⁾——、それは中世ヨーロッパ世界のなかから西ヨーロッパだけを弧立的に對象としていた従来の研究と實はおなじようにあやまちをおかすことになるであろう。

わたくしたちがすでにみたように、ギリシア教父の神

學上の作品は西ヨーロッパにおいてはほとんどもっぱら、そして時の経過とともにますます、ラテン語譯によつてのみ讀まれた⁽²⁶⁾。さらにはまた、西ヨーロッパにおけるギリシア語の知識が量的には豫想外に廣範であつたことを指摘する A. Michel の研究(註 10)も、その知識が質的には非常な問題性をもつこと、ギリシア語をもちいるビザンツとラテン語を用語とする西ヨーロッパとの言語上での懸隔化こそが、やがて來るべき兩教會の分裂に就いて、ビザンツ人自身の政治的・文化的スーベリオリティ・コムプレックスとならんで一契機としてはたらいしたこと、に同時におよぶのである。

ではこのような懸隔化じたいはいったいかなる情況のもとにおこつたのであろうか。わたくしたちはこのおなじ A. Michel とともにこの點について、あらためて民族移動の歴史的意義をおもうべきであらう⁽²⁷⁾。つまり西方においてすくなくともギリシアの古代は民族移動の波のうちに拉し去られてしまつたのに反し、それは東方においては生命をたもち、たえずあらたに咲きつづけたのである——最近における「古代末期」の積極的な評價がえをおもえ⁽²⁸⁾——。換言するならば、民族移動によって東

西間に大きな地すべりがおこった結果として、この兩部分はそれぞれまったくことなつた情況下におかれてしまつたのである。さらにその結果として、東西兩部分はそれぞれが他とことなつた問題に直面することになつたのである。

(25) F. Dölger, *Byzanz und das Abendland vor den Kreuzzügen*. S. 71.

(26) この語は(4)にみえたと文獻のほかに(2)の註文を参照。B. Altaner, *Augustinus und Athanasius. Eine quellenkritische Studie*. Rev. Benedict. (1949) 82—90. Id., *Augustinus und die griechische Patristik*. Rev. Benedict. (1952) 201—213.

(27) A. Michel in B. Z. 45 (1952) 408—417 (Besp. von M. Jugie, *Le Schisme byzantin, Aperçu historique et doctrinal*. Paris (P. Lethielleux) 1941, VII u. 487 S.)

(28) 424—425 N.—H. Baynes, *The Decline of the Roman Power in Western Europe: Some Modern Explanation* (1943) in *Byzantine Studies and Other Essays* (University of London, The Athlone Press 1955, XI 392.) 83—96. 425—426 H.—L. Martou in *Gnomon* 25 (1953) 187—190. (Besp. von S. Mazzarino, *Aspetti sociali del quarto secolo. Ricerche di storia tardo-romana*. (Problemi e ricerche di storia antica. 1.) Roma Bretschneider 1951. 441 S.)

(a) 精神の懸隔化

わたくしたちはこのような分化の傾向をなによりもまず、古代文化にたいしてビザンツと西ヨーロッパがおこつた異つた對決の仕方にみうるとおもふ。そしてこの態度の相違を追求したのが E. v. Ivánka の諸論文である。

(29) E. v. Ivánka, *Abendland und Byzanz. Wissenschaftliches Weltbild*, I, 1948, 205—219. は「ビザンツが自分たちのキリシヤ教父の手で完成され、もはや一劃だに加える餘地のない古代的・キリスト教的な綜合體系に固執してゐたのに反し、そのような傳統をもたない西ヨーロッパはたえずその都度古代と對決しなければならなかつたことを論じてゐる」(cf. F. Dölger—A. M. Schneider, *Byzanz*. S. 918.) cf. Id. *L'eredità del mondo antico e la polarità di Oriente e Occidente*. Delta, N. Ser. 1 (Gingno 1952) 1—4. —Id., *Der Zerfall der antiken Kulturwelt als geistesgeschichtlicher Vorgang*. Saeculum 3 (1952) 237—254. は「そのような中世東・西ヨーロッパの古代文化との對決上での相異が、現代の兩世界にまで相異つた精神的刻印をあたらえてゐる事情にとゞまらなかつた」(cf. B. Z. 45 (1952) 471)° —Id., *Die Rolle des Platonismus und des Aristotelismus in der Entwicklung der östlichen und westlichen Ideologie* (ungar.). Theologia. 10 (1943),

61—73 は、東方のプラトンの精神類型と、西方のアリストテレス的なそれとの對比におよんだもの。そのほか F. Dölger, *Der Klassizismus der Byzantiner, seine Ursachen und Folgen*, Geistige Arbeit, 5 (1938), N. 5, 3—5. —H. L. Mikolitzky, *Byzanz und das Abendland*, Die Österreich. Nationalbibliothek, Wien (1949), 473—484. —G. Stadtmüller, *Das Abendland und die Welt der oströmischen Christenheit*, Histor. Jahrbuch, 74 (1955), 164—174 (cf. B. Z. 48 (1955) 237) のことを参照。

(b) 社會經濟事情のうえのコントラスト

この東西への分化の過程は、行政機構の面においても看取できる。すなわち E. Denougeot によれば、現實の要請にせまられるたびに分治の方策を採用しながらも、テオドシウス帝の死(395)までは統一の政治體をかつちづけていたローマ帝國は、その後アラリックによるローマの占領(476)までの十五年間にいくたの有爲變轉を蒙った結果として、東西兩部分への分裂化を最終的に明確化してゆくのである。⁽⁹⁰⁾

この政治上での分化と時をおなじくしてますますふかまっていたローマ帝國の東西兩部の社會經濟上でのコ

ントラストについても、さいきん論争がたたかわされた。G. L. Bratianu は、金のストック量、人口の密度、商工業の分布、統制經濟への習熟度、などの點でローマ帝國ははじめから二つの異質的經濟を内包しており、そのいみで Pirenne が七世紀末にかんじてえがいた構圖は、このような東・西ヨーロッパの差異がゆきついた終點にすぎない、と説いた。⁽⁹¹⁾これにたいして反駁にたつのが F. Lot である。かれは當時の商業が奢侈品取引であったことに徴して、それが當時の社會經濟生活にたいしてもつていた役割を過大視してはならないこと、すくなくとも四世紀においてはコンスタンティノープルをはじめとする東方の大都市の人口について、あまり高く評價することは危険であること(たとえばコンスタンティノープルも一五万以上ではない)、を指摘しつつ、西方は東方にたいし既耕地と住民の點でぬきんでいたのであって、經濟的にも決して東方におとるものではなかったこと、西方における文明の没落はむしろ政治的混亂と、アヴァール人、ランゴバルド人、スラヴ人、アラビア人、スカンディナヴィア人の外部からの攻撃ともっぱら歸せらるべきであること、という結論を出すのである。し

かしながらこの Lot 説にたいしては、わたくしたちは「Karayannopulos」ともにやはりつぎのように言わねるをえないとおもう。「Lot がおこなった東・西ヨーロッパの経済活動の對比は理論的にはたしかに正しいといえる。しかしながら當時の経済生活において西方がうけもつにいたった役割が東方に比してはるかに低いものであったこと、このことはうかすことのできない事實なのである。そしてこの確證にくらべては、この事實が、Lot の説くようにただ専ら外的な諸要因にのみ歸せらるべきかどうかなどということはさほど意味をもたないものである。」

然り！最近のすべてのビザンツ社會經濟史研究がその解明のために努力をばらっている窮極の問題こそ、ビザンツが同時代の西ヨーロッパにくらべてもっていた特質はなにか、という問いにほかならないのである。そこでわたくしたちはこれら研究成果の一々についてあたかなければならないことになるが、それは紙数の関係でおぼつかない。そこでわたくしなりに整理をつぎのようにおこなうこともゆるされとおもう。⁽³³⁾

(36) E. Demougeot, *De l'unité à la division de l'empire*

romain 395—410. *Essai sur le gouvernement impérial*. 1951. Paris Librairie d'Amérique et d'Orient Adrien-Maisonneuve. XV 618 S.

(15) G. L. Brătianu, *La distribution de l'or et les raisons économiques de la division de l'empire romain* (1935). in *Études byzantines d'histoire économique et sociale* (Paris, Paul Geuthner 1938. 294 S., 1 Bl., 20 Taf.) 57—91.

(35) F. Lot, *De la prétendue supériorité économique de la partie orientale de l'Empire romain sur la partie occidentale* in *Nouvelles recherches sur l'impôt foncier et la capitation personnelle sous le Bas-Empire*. Supplément au fascicule CCLIII de la Bibliothèque de l'École des Hautes Études. [Bibliothèque de l'École des Hautes Études, 304.] (Paris, H. Champion 1955. 195 S.) 159—179. — J. Karayannopulos in B. Z. 49 (1956) 420—426.

なお中世初期における商業の性格についていうならば、J. Karayannopulos もその書評で指摘しているように、當時の商業は奢侈品取引をその内容とする關係上、一般大衆をではなく、ごく限られた範圍の社會層をうちにひきこんだにすぎないという。F. Lot の説は「たしかに H. Pirenne 説の最も痛いところを衝いたものということができるであらう。なぜならば當時の經濟的自己充足狀態からみて、このような性格の商業の途絶が社會經濟構造を變革ち

せたなどと考えすることはできないからである。これは註(15)にあげた A. Rüsting および R. S. Lopez の書物もひとしく指摘するところである。

なお F. Lot の同論文集中に収録された Id, *De la circulation de l'or du I^{er} au VII^e siècle*. 126—158. は四五・六世紀を通じ西ヨーロッパでは金の大ストックが依然存続したことを説いたもの。しかしながら「Karayannopulos もその書評で指摘しているように、西方の金貨の質はすでに六世紀およびそれ以前においてきわめて劣悪であり、局地的な取引において收受されたにとどまって、それ以外のばあいには受取られることはなかったであろう」と、したがって西方独自の刻印をもった金貨鑄造はカロリング時代以来途だえてしまったこと、そのような西ヨーロッパの貨幣にとっては、アラビアおよびビザンツ硬貨とあらそって貨幣流通場裡に入ることなど到底およびもつかなかったであろうこと、をおもうべきである。

(33) 一九五四年までの研究状況については、拙稿「ビザンツ社會經濟史研究における諸傾向について」社會經濟史學第二十卷第四號／六號 (Mein Beitrag, Byzanz. — Wirtschaft- und sozialgeschichtliche Forschungen nach dem letzten Krieg—The Socio-Economic History. 1954. 1—12)

ビザンツの流通經濟事情一般にかんする敘述として、わたくしたちは The Cambridge Economic History

of Europe. Vol. II 中に「古代末期については F. W. Walbank の寄稿を、ビザンツ期プロローグについては S. Runciman のそれをもつにいたった。前者は古代經濟の特質と限界、三世紀のインフレーションを経てあらわれたところの「強制」經濟、「實物」經濟、「自給」經濟などの複雑な諸問題、について研究の現段階を示してくれるものとして、後者は、從來この種の一般敘述が缺けていたゆえをもって、ともに貴重である⁽³⁴⁾。

ところで「實物」經濟の問題については「The Cambridge Economic History of Europe. Vol. II. だぶれられるにふたつていながら S. Mazzarino の問題作があるのである⁽³⁵⁾。

すなわち H. Geiss, *Geld- und naturwirtschaftliche Erscheinungsformen im staatlichen Aufbau Italiens während der Gotenzeit*. VSWG. Beih. 27 (1931) 47 中央集權的・官僚制的國家機構をたてまつった後期ローマ帝國が少くとも原則として貨幣經濟を基礎としてのみ存立していることを指摘した。ついで G. Mickwitz, *Geld und Wirtschaft im römischen Reich des 4. Jahrhunderts*. (Commentationes humanarum litterarum,

IV) Hensingsfors, 1932. は、古代末期の複雑をきわめた経済事實をそれとしてとりあげ、古代経済は通説の說くように紀元後三世紀を経てそれまでの貨幣經濟から實物經濟へと轉じたのではないこと、そうではなくて當時の經濟の實態は、國家財政における實物經濟(實物徵集と實物給與)、私經濟における貨幣經濟、の並存として把握されるべきこと、を説き、國家財政に實物經濟の採用を餘儀なくさせたのは、當時の主導的社會勢力である役人、軍人という給料生活者がインフレーションのもとで納税者の犠牲において自分たちの利益擁護をはかろうとするうごきであるとした。つまり Mickwitz は通説のたっている經濟的な次元から、すぐれて社會的な次元へと問題をうつすことによって、そのあらたな展開をはかったわけである。そしてかれによれば國家財政によって採用されたこのような實物經濟こそが、つづいて諸般の公的強制措置の實施、社會的矛盾の激化、大土地所有者階級の擡頭、國家權力の解體、という一連の連鎖反應を西ローマ帝國において誘發させたのであった。したがって四・五世紀にかけてこんどは逆に annona の金納化(adaeratio)がおこなわれたとしてもそれは西方にお

いては、東方におけるようにそのまま貨幣經濟の完全なる復歸を意味しなかったわけである。

以上の Mickwitz の解釋は Walbank の前掲概説中にうけいれられたが、反對にこれに疑問を提出するのが前記 Mazzarino である。かれは、インフレーション下において實物給與は俸給受領者のための措置であり、その adaeratio は納税者の利益のためになされたという Mickwitz がその根據とする SHA Claud. 14, 14 (なかなく……, sed ita ut nihil adaret, …… の句)を全く逆の意味に解釋する。つまり、國家役人はまず實物租税の貨幣換算率を最高につり上げることによって市場價格との差額(interpretium)をわがものとした、つづいてこの手にした貨幣額をもって市場で必要な物資調達をおこなうさいには、最低の價格をおしつけた、つまり adaeratio は必然的に強制購入(coemptio)を随伴したること、したがって通説上 Anastasios I. の一立法(C. Just. X, 27, 2, 84)にはじめてあらわれるとされた *οὐκωρὴ* = coemptio は事實上 De publica comparatione の標題のもとにまとめられた四世紀の二立法(C. Th. XI, 15, 1—361; ibid. 2—384)によみとるべき

ること。adaeratio 實施によってこのような不利益を蒙る納税者の立場をしめすこそ Vita Claudii の上掲箇處であること(しかもこのばあい納税者とは大土地所有者階級であることは、SHA のいくつもの記事、および右の四世紀の二立法からもしめされること)。このように Mazzarino は adaeratio が納税者に有利であったとする Mickwitz とは反對の立場をとるのである。Mazzarino のいまひとつの功績は、かれが古代末期の社會對立の一局面にあたらしく光をあてた點にあるとおもう。つまり Mickwitz によつては納税者としていわば一括されてしまった存在が、實は階級的利害關係を必ずしも一つにしない二つの異質的部分、つまり元老院階級所屬の大土地所有者(possessores)と下層階級所屬の納税義務者(col-latores)とから成ること、を指摘するとともに、前者の利益代辯者としての SHA に相當する後者の利益代辯者を Anonymi de rebus bellicis (S. Reinach, *Un homme à projet du Bas-Empire*. Rev. arch. 1922, II, 205 sqq.) のなかに發見した點にあるとおもう。

Ensslin も指摘しているように、SHA の問題の箇處を Mickwitz のいふ、實物の adaeratio に反對しよう

とする官僚勢力の利害關心の表出とみなすことは Mazzarino の批判の結果不可能となつたとしても、インフレーション下では役人、軍人は實物での確定額で俸給をうけとうとする傾向をもつた、という Mickwitz の基本テーゼはいぜんとしてゆるがないであらう。がそれはともかく、Mickwitz および Mazzarino の研究の結果、古代末期は實物經濟への自然的復歸の時期である、などとは單純にいえないうこと、反對にディオクレティアヌス、コンスタンティヌスによつて確立された貨幣制度は *solidus* の名がしめすとごく以後數百年のあいだ東ローマ帝國でゆるぎないものであったこと、という前提のもとに、貨幣經濟へのこのような復歸を可能ならしめた東方の社會事情とそれをさまたげた西方のそれとを對比的に考察するみちがひらかれたわけである。

十世紀の“*eparchikon biblion*”についてはすでにふれたが、古代末期の「強制」經濟の一つのあらわれとしての商工業者の組合については、四・五世紀をあつかつたものとして F. M. de Robertis の著があり、⁽³⁶⁾この強制組合の中世への連續性の問題については、M. di Lorenzo が賛成の立場を、⁽³⁷⁾G. M. Monti が反對の立場をとつてい

(38)

古代末期の國營工場の問題は、ちびに Karl Bücher, *Die Diokletianische Taxordnung vom Jahre 301*. (1894) in *Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte*. Tübingen 1922, 179—232. 以下は、Oikenwirtschaft 説と關連して、ちびにちびに、ちびにちびに A. Persson, *Stat and Manufactur in römischen Reiche*, Lund, 1923. 以下は、國營工場の市場向け生産が問題とされた。この兩者にたつて批判は Mickwitz の前掲書にくわしいが、この點では Walbank のちびの概説は、研究の現段階にたつて Cod. Th. と Cod. Just. との法典、なかんずく *Natitia Dignitatum* を基礎として、國營工場の實體について、好箇の指摘をおこなっている。なおちびにばら私企業ギルドを對象として、eparchikon biblion の範圍外にあったデザンツ期プロローニーの國營工場ギルド (*demosia somata*) は、R. S. Lopez のデザンツ絹織物工業にかんする總括的研究によつて私企業ギルドとならんでとりあげられ、わたくしたちはここに、はじめてデザンツ期プロローの國營工場について詳述をめぐらした。

(39) F. W. Walbank, *Trade and Industry under the*

Later Roman Empire in the West. The Cambridge Economic History of Europa. Vol. II. Trade and Industry in the Middle Ages (Cambridge Univ. Press 1952. XV 604. with IV plates). 33—85.—S. Runciman, *Byzantine Trade and Industry*. *ibid.* 86—118.

ちびのちびに S. Runciman の著 *The widow Danielis*, *Etudes A. Andreadès* (Athen 1940) 425—431. 以下は、ちびにちびにの註記論文 (S. 106) ちびに F. M. Heichelheim, *Römische Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*. in *Römisches Weltreich und Christentum* ([Historia Mundi. Ein Handbuch der Weltgeschichte in 10 Bänden, begründet von F. Kern, herausgegeben von F. Valjavec, Bd. 4] München, Leo Lehnen (1956). 611 S. Mit zahlr. Karten im Text und 2 synchronistischen Tabellen.) 以下は、ちびにちびにちびにの解釋、すなわち九世紀後半ペロポネソスで女主人ダニエリスが三千人の奴隷をもつて織物製造をおこなったという解釋を Theopphan. *Cont.* 227—8, 316—21. かちびにちびにちびにちびにちびにの指摘をわたくしたちは、すびに『奴隷制』の『の在り方』史學雜誌第六十四編第十一號 (Meine Besprechung von A. Hadjiniolaou-Marava, *Recherches sur la vie des esclaves dans le Monde Byzantin* (45. Collection de l'Institut français d'Athènes). 1950 Athènes 134 S. in *Historical Journal of Japan* 1955 Nov.) 64—80. 以下は、ちびにちびにちびにちびに F. Dölger in B. Z. 49

(1956) S. 416/8 (F. M. Heichelheim になづける書評)に
 417ページのわたへこの批判は確證づけられた。

(55) S. Mazzarino, *Aspetti sociali del quarto secolo*. Ricerche di Storia Tardo-Romana. (Problemi e Ricerche di Storia Antica 1). Roma, "L'Eterna" di Bretschneider 1951. 440 S., 2 Bl. cf. W. Ensslin in B. Z. 46 (1953) 338—389. — H.-I. Marrou in Gnomon 25 (1953) 187—190. — J. Karayannopoulos, Die Chrysoteleia der Jünga. B. Z. 49 (1956) 72—84. などへ 77—79.

(56) F. M. de Robertis, *Il diritto associativo romano*. Bari, G. Laterza e Figli 1938. XVI, 485 S.

(57) M. di Lorenzo, *Nuove discussioni sull'origine delle corporazioni medievali*. N. Riv. Stor. Ital. 22 (1938) 102—107.

(58) G. M. Monti, *Corporazioni medievali e scuole bizantine*. Atti IV Congr. Naz. di Studi Romani 1 (1938) 394—399.

(59) R. S. Lopez, *Silk Industry in the Byzantine Empire*. Speculum 20 (1945) 1—42.

以上からも明かであるようにビザンツ帝國は後期ローマ帝國のそのままの繼續として、後者の國家統制主義をうけつた⁽⁴⁰⁾。つまり、同時代の西ヨーロッパ封建社會にはその比をみないような強大な國家權力というものがある。

この國家の貨幣制度を支え、またそこにおける商工業活動に独自の相貌をあたえる結果となった。ところで國家權力による根本的な規定づけは、いままで、ふれてきた流通經濟面のばあい以上の明確さをもって土地所有面に、またそれを基礎とする社會構成に看取される。なによりもまず、ヘレニズム エジプトに通用していたあの王有地 (*baouky* 𐤁𐤏𐤕𐤕) の理論の再現を、わたくしたちはバシレイオス二世の九九六年の新法 (*Zepi*, *Jus Gr.—Rom.* I, 269, 20) 中に主張されているところの、全土地所有にたいする皇帝の上級支配權にみいだす⁽⁴¹⁾。またビザンツの社會構成についても、たとえばビザンツにおける貴族の在り方というものは、同時代の西ヨーロッパ貴族のばあいと非常に異っている。すなわち、中世の西ヨーロッパにおいては、貴族たるの身分はランデスヘルにたいするレーエンのきずなにもとづいている。そしてその結果付與された土地所有から、貴族は他の社會階級にぬきんでた特權的地位をひき出す。これに反してビザンツにあっては、官僚・軍隊機構の階段をかけたのぼって貴族階級に列する途がひらかれている。もとよりビザンツにおいて、貴族はその地位を強化するために土地の集中獲得に

つとめたし、貴族のためにとくに保留されていた高位の官職就任が貴族に土地獲得の機会を容易ならしめたことも事實である。しかしながら、ビザンツにおいての貴族の土地所有はあくまでも貴族身分への所屬性の結果なのであって、斷じてその前提なのではない。換言するならば、いかなる貴族(*dynastis*)も土地所有者(*dynastis*)である必要はなく、また反對にいかなる土地所有者もこれまた貴族たるを要しない。またビザンツ後期においてプロノイア制の導入とともに、ビザンツにも西ヨーロッパ類似の封建秩序が出現したことは事實である。しかしながらそのばあいでも、一介の軍人(*στρατηγός*)にプロノイアが付與された例また少ししないのである。⁽⁴³⁾ところで社會構成のうえでこのビザンツ貴族の在り方にもました獨自性をしめすが、ビザンツ農民のばあいだとおもう。そしてこれはわたくしたちをみちびいて、最近におけるビザンツ農業史上のいくたの業績をかえりみるにいたらせるのである。

(40) たとえば D. A. Zakynthos, *États byzantin et expérience hellénique*. *Μελέματα*. Mélanges H. Grégoire II (= *Annuaire Inst. de Phil. et d'Hist. Or. et*

Sl. 10) (1950) 667—668. 611を参照せよ。

(41) F. Dölger in B. Z. 45 (1952) 194. (Zakynthos の前註の論文にたいする書評。)

(42) F. Dölger in B. Z. 49 (1956) 125—129. (Bespr. von Ph. P. Argenti, *Libro d'Oro de la noblesse de Chio*. Vol. I. Notices historiques.—Vol. II. Arbres généalogiques. London, Oxford University Press 1955. X, 164 S., 1 farb. Taf. 4 Bl., 324 S., 1 Bl. 2e.) 112 S. 127 を参照。なおビザンツ貴族一般に「別してはその歴史のうえに轉機をしめすものとして、重要な史料が Kekaumenos, Strategikon による (Vademecum des byzantinischen Aristokraten. Das sogenannte Strategikon des Kekaumenos. übersetzt, eingeleitet und erklärt von H.-G. Beck. (Byzantinische Geschichtsschreiber, hrsg. von Ivánka, Bd. V) Graz—Wien—Köln, Verlag Styria 1956. 164 S.)」の點について註(23)の拙稿の言及 (mein Aufsatz, *Probleme der grundherrschaftlichen Entwicklung in byzantinischen Reich*. I.) 152/3 を参照。

すでに前世紀の末に帝政ロシアの偉大な歴史家たちによって本格的な歴史研究のテーマにまでたかめられながらも、續コンヴェンツィオナル史學界によってごく最近までうちすてられており、他方西ヨーロッパ歴史學者たちによってもかえりみられるにいたらなかったビザンツ農業史

が、F. Dölger や G. Ostrogorskiy を先頭として最近異常なまでに進展をみた事情については、すでに註(33)の私の展望でふれておいたから、ここではくりかえさない。しかしながらそのような研究の進展度とは、執筆後いまだ數年をかぞえるにすぎない私の展望に、いくつかの加筆、修正をせまるほどなのである。

史料刊行、なかんずくビザンツ後期の修道院所藏文書の刊行は、F. Dölger, *Aus den Schatzkammern des heiligen Berges* (1948), ⁴⁴ Archives de l'Atlios につづいていぜん着實な歩みをつづけている。その詳細は個々の時期をとりあげるごとに指摘してゆくこととし、⁴³ 研究文獻に眼を轉ずるならば、ビザンツ農業史全體の本質的規定づけにかかわるような重要な作品が、ここ數ヶ年のうちにいくつもあらわれた。Ostrogorskiy は、自らがおこなってきたビザンツ社會經濟史にかんするいくつかの個別研究をその著 *Geschichte des byzantinischen Staates*² (1952) において集大成し、ビザンツ帝國の社會經濟の發展のあとを鮮かな筆致をもつてうきあがらせながら、一口にいつて最近の研究は、ともかくもこのようにしてひかれた發展の基本線を、あるいは深化し、ある

いは修正、批判するところになりたっているとかんがえてよい。すなわち、Ostrogorskiy 自身、そのおこなったビザンツ史の三時代區分中最後の時期に相當するビザンツ後期をとりあげ、Proneia 制の發展を通じてビザンツ帝國の封建化の過程を詳細にたどるとともに、土地臺帳(Praktika)の分析を通じて大土地所有の經濟的基礎構造をあきらかにしたが、⁴⁴ つづいて從來の見解を一そうコンセークエントにおしすすめたものというべき論文を發表した。ビザンツにおいては十世紀以降自由農民は存在しない、存在する農民はすべて隸屬農民(Paroiatoi)なのであって、ただその所屬性にかんして國家の隸屬農民、私的所領の隸屬農民、の二群に區別されるにすぎない、という大膽な主張がそれである。⁴⁵ この Ostrogorskiy の新説が學界に投じた波紋については、わたくし自身すでに別の箇所において論じたところであるし、⁴⁶ 本稿においても、十字軍以降をあつかう後段でふれるのが適當とおもわれるので、ここではたんに以上の指摘にとどめておきたい。

ながくはないがビザンツ農業史の主要な問題點をつくしている一九三三年發表の論文を補記して論文集 By-

zanz und die europäische Staatenwelt. Buch-Kunstverlag, Ettal 1953. 382 S. 中に著者の F. Dölger は、Bayerische Akademie der Wissenschaft の Sitzung vom 1. März 1957 に “Zur Frage der Feudalität in Byzanz” と題する發表をおこなひ、四・五世紀以降のビザンツにおける土地所有の歴史(四・五世紀における小土地所有を犠牲にしての大土地所有の擴大。小土地所有、およびこれに八世紀初頭以降くわつたものとしての農兵保有地、にたいする十世紀の皇帝保護政策。封建化の開始。十一世紀中葉における Pronoia の導入と十三世紀以降におけるその世襲化)をたどつたが、そのさう Ostrogorskij が提示したビザンツ後期における自由農民層の存続の問題にふれ、Ostrogorskij を批判してその存続を主張した。⁽⁴⁷⁾

G. Rouillard は、そのビザンツ農業史において、一貫した自由小土地所有者層の存続こそビザンツ農業史の特色であるという指摘をおこなつた。⁽⁴⁸⁾

さらにはまた、主たる分析の對象をビザンツ後期のブラクティカにおいているけれども(この點にかんするかれの所論については後述をみよ)、西ヨーロッパ封建社

會との對比のもとに、ビザンツ農民の社會的環境に解明の光をあてた N. G. Svoronos の示唆に富む論文があらなっているいくつかの指摘もわたくしたちにとってみのがすことのできないものだともう。ビザンツにおいてはその全期間を通じて領主直營下の domaine は、西ヨーロッパのばあい(十二世紀まで耕作下の所領面積の二分の一から三分の一をしめる)ほど大きな面積を占めていないこと。その結果所領經濟は自給自足の單位を形成するほど經濟上重要な役割を演じてはいないこと、反對に農耕の重點は農家の小經營にあること。農民は、隸屬農たると自由農たるとを問はず、原則として地方都市または大村落に集つて住んでおり、おなじくそこに居住する手工業者や商人とともに、これら地方都市ないし大村落をして農村地方の經濟的中心たらしめていること。さらにはビザンツの大土地所有者および Pronoia 保有者も首都ないしこれら地方都市にすむレンテン寄生生活者であつて、この點その所領にとりかこまれた城砦に住む西ヨーロッパの封建貴族とは本質的に異なること。N. G. Svoronos の指摘はこのような點にわたるのである。⁽⁴⁹⁾

しかしながら、問題となりうる限りの史料ととりくむ

とともに、一々の個別的問題についてその研究の現段階と對決をおこなっている點で、以上すべてにもまして重要でありかつ有益なのが、P. Lemerle の長大な *Mélanges* である。すなわち、かれはこの論文で、まず初期ビザンツ（四―六世紀）の土地所有がふくむ諸問題（*limitanei, castellani* などの軍事保有地制、*coemptio, epibole, capitiatio-jugatio, adacratio* などの財政制度、*colonatus, patrocinium* などの社會制度、大土地所有者と自由農民層との關係、等々）をとりあげ、同時代の西ヨーロッパに比してビザンツを特色づけていた“la continuité de la tradition”と“la puissance de l'organisation étatique”を指摘する。つづいてビザンツ中期（七―九世紀）を、主として農民法を通じて分析し、農民共同體の實態を明かにするとともに、そこにあらわれるところの、移動の自由と所有地の處分の自由とをもった中・小農民層の出現を、(Ostrogorski)のごとく軍事保有地 (*στρατιωτική κτήνα*) 制の設定の結果とはみず、反對に、七世紀以來ビザンツ領内に大量にスラヴ人が移住してきた結果労働人口が増大したこと、そのけっか社會的緊張がゆるんだこと、のあらわれとみるのである。最

後に Lemerle はビザンツ帝國の最盛期（九―十一世紀）をとり上げる。そしてまず“Le traité fiscal”を通じて、農民共同體のこの期における存続、しかし同時に同史料から看取される連帶性決壊の諸兆候、を指摘するとともに、つづいて十世紀のマケドニア王朝の皇帝たちが發布した十四の土地立法の所屬年代を確定し、これら新法の分析を通じて、《有力者》(*δυνατοι*)と《弱者》(*πτωχοί*)との社會的對立關係をあきらかにする。Lemerle は續いてこれら新法中で問題とされた教會の土地所有、さらにはこれら新法のいくつかが農民所有地とならんでないし單獨でとり上げている軍事保有地 (*στρατιωτική κτήνα*) の問題に、コンスタンティノス八世の諸著 (*De Administrando Imperio* および *De Caeremoniis*)、諸種の《Tactica》、九―十世紀の聖者傳、を採用しつつたちむかう（かれの解釋が *Θέμα* 論争にたいしてもついに、後には、後にあらためてとり上げる）。さいいに Lemerle は、十一世紀初頭の一連の修道院所藏文書を考察し、ここにあらわれた私的大所領の隸屬農民 (*ἀρεταίς, δουλοπόροι*)、および國家にたいし個人的に（つまり共同體を通じて——*derrière le relatif*

anonymat de la collectivité communale——ではなく、および直接に、密接な関係をもったときの三種の土地所有者、すなわち(1)國家農民(τράποδοι ἀγροειδῶν)、(2)stratēia(後述をみよ)を賦課された土地の所有者(στρατῆραι)、(3)郵便義務を負担しなければならぬために國税を免除された土地の所有者(ἐξευνοούμενοι τοῦ ἀσίου)について分析をくわえる。このうち(3)はまもなく史料から姿を消したばかりであられないが、(1)は前述のように、Ostrogorskiの新説によって最近論争の焦點となった當のものである。Ostrogorskiはこの國家農民を、さきの十世紀の諸新法にあらわれ、從來自由農民を指すものと解釋されてきた《弱者》と同一視し、そこから、ビザンツ後期には自由農民層は存在せず、存在するのはただ隷屬農民のみである(その隷屬關係がたとえ國家にたいしてであらうと、私的大所領主にたいしてであらうと)とした(前述)。Lemerleはこれにたいして國家農民とは區別された自由農民の存在をみとめるとともに、他方この國家農民を、國有地の隷屬農民(paysans-seifs installés sur les domaines de l'empereur)だとする Angelov や Dölger の解釋とはちがって、荒廢化

し共同体への所屬性からきりはなされて國庫に歸した土地に、stratiotaiのはあいとおなじ手續きで(後述)設置されたところの農民の一カテゴリーとみるのである。そして Lemerle はこの十一世紀を、封建化の進行による國家權力の弱體化の時代と考える論者とは反對に、この時代國家がおこなったところの土地のみならず勞働力にたいする統制(逃亡國家農民にたいする強權の發動、私領主に農民を贈與しあるいは私所領農民に免税をおこなうばあいの該當農民數の限定)に、強力な regime étatique のいぜんたる存續をよみとりつつ、この長い論文を閉じるのである。

以上の、いわばビザンツ農民史全體をながめうる立場にたった敘述とならんで、そのうちの特定の一時代や一地域をとりあげた個別研究もいくつかなされた。

M. Palasse は古代末期の東方の colonatus と西方のそれとの差異を財政的・軍事的諸理由、なかならず東方における中央集權的國家機構の嚴存と西方における有力者(potentiores)の擡頭に歸因づけた。⁽⁵⁾

J. Karayannopoulos はビザンツ初期の租税上での連帶責任制の問題をとりあげ、荒蕪地の租税の強制割當にて

あたって同時に該當の土地が租税負擔者に移讓されるばあいとそうでないばあいとがすでに前二世紀から相ならんで出現すること、および *εργολά* の語がもっぱら前者のばあいに用いられ、*ἀλλοτρίων* (—ον) がもっぱら後者のばあいに用いられたとはかぎられないこと、を指摘する。そして *εργολά* が大土地所有を基盤とする七世紀までの初期ビザンツに固有の制度であり、つづいてビザンツ帝國の社會構造上での變化(農民共同體の優勢化)にみあって *ἀλλοτρίων* にとってかわられた、とする Ostrogorskiy の解釋を批判し、反對に初期ビザンツにおける自由村落の存續、その國家による保護、の事例をあげるのである。⁽⁵²⁾

個々の地域についての研究としては、A. Ch. Johnson の諸論考⁽⁵³⁾ および G. Rouillard の註(48)の書物での言及につづいて、A. Bataille がビザンツ期エジプトのパピリ撰集を刊行した。⁽⁵⁴⁾ その他パピリ集としては、テ・バイスのアラビヤ人 Emir のもとで 703—715 にわたり Pagarchos 職をつとめた大土地所有者 Apollónos Anó の文書刊行がある。同文書が史料にとぼしい同時代のビザンツ自體の財政制度にたいしても、つづいて重要な重要性につ

いては註(1)の拙稿でふれておいた。⁽⁵⁵⁾

エジプト以外の地域については、四世紀のアンティオキアの農村地方で普及していた弱者にたいする有力者の保護の慣習 (*patrocinium*) を知るために重要な Libanius の *De patrociniis* が L. Harmand によって考察の対象とされ、P. Petit もその大著中でこの問題にふれている。⁽⁵⁶⁾ さいごにシリアにかんするものとして、主としてビザンツ初期を對象とした G. Tchalenko の業績をあげなければならない。そしてその結果あきららかにされるのは、この地方でも四世紀以降に村落が優勢化するという事實なのである。⁽⁵⁸⁾ (一九五八・十一・十四)(未完)

(43) ただしここでは主要な文書刊行・研究書だけをかがけておく。

F. Dölger, *Byzantinische Diplomatik*. 20 Aufsätze zum *Urkundwesen der Byzantiner*. Etrai, Buch-Kunstverlag (1956). XVI, 419 S. 27 Taf. 147 5 mm 2 諸雑誌や記念論文集に投稿され、閱讀がむずかしかったこの碩學の珠玉の考案をあつめた貴重なもの。

A. Guillon, *Les archives de Saint-Jean-Prothome sur le mont Ménécle*. Paris, Presses Universitaires de France 1955. 4 pl. h. t. 220 p. (Bibliothèque Byzantine, publiée sous la direction de Paul Lemerle).

Documents, 3.) は、同叢書から續刊豫定の『のちの諸修道院の所藏文書集のなかをけをなすものである。Notre-Dame de Lembos の所藏文書 (H. Glykazi 編)——チャサリアの諸修道院の所藏文書 (M. Lascaris 著、A. Guillou 譯)——ムスラの Xenophon 著、Pantokrator 所藏文書 (R. P. V. Laurent 編)——Xeropotomon 所藏文書 (Bonpaire 編)——Rossikon 所藏文書 (P. Lemerle 編)——Docheiartou 所藏文書 (E. Lapa-Zizika, H. Glykazi 編)——大 Laura 所藏文書 (1 卷) (P. Lemerle, A. Guillou, N. Svoronos 編)。この同叢書は『Documents』の第 1 卷は V. Laurent, *Documents de sigillographie byzantine. La collection C. Orghidanu*. [Bibliothèque Byzantine, Documents, 1.] Paris, Presses Universitaires de France 1952. 2 Bl., 342 S., 1 Bl., 69 Taf., verstaïres de France 1952. 2 Bl., 342 S., 1 Bl., 69 Taf., dar. 56 Lichtdrucktaf. 40. の第 1 卷は I. Mélikoff-Sayar, *Le Destrân d'Umar Posha (Düstürnâme-i Evver)*. Texte, Traduction et Notes. [Bibliothèque Byzantine, Documents, 2.] Paris, Presses Universitaires de France, 1954. 155 S. の 2 卷は cf. N. G. Svoronos in Revue Historique, 82^e Année——Tome CCXIX——1958. 144—146.

(4) Pronoia にかんするセルビア語の論文 (1951) および Praktika にかんするロシア語の論文 (1948) の兩論文を フランス語註して得た G. Ostrogorski, *Pour l'histoire de la féodalité byzantine*. Traduction française

de H. Grgoire, publiée avec la collaboration de P. Lemerle (Corpus Bruxellense Historiae Byzantinae, I.) Bruxelles, Éditions de l'Institut de Philologie et d'Histoire Orientales et Slaves 1954 XVI, 338 p. 法
 国語学研究所蔵。なお本書の第一論文については、註(24)の私の書評参照。

(45) G. Ostrogorski, *Quelques problèmes d'histoire de la paléographie byzantine*. [Corpus Bruxellense Historiae Byzantinae, 2.] Bruxelles, Éditions de Byzantion 1956. 80 p. cf. J. Karayannopoulos in B. Z. 50 (1957) 167—182.

(46) 拙稿「ビザンツ農民にかんする若干の考察」一橋大學研究年報 經濟學研究二(一九五八)(mein Aufsatz, *Beobachtungen zur byzantinischen Bauerngemeinde. Jahrbuch der Wirtschaftswissenschaft, I. Tokyo, Hitotsubashi Universität 1958*)

(47) F. Döigert, *Die Frage des Grundeigentums in Byzanz, in Byzanz und die europäische Staatenuelt*, 217—231. など講演の詳細は後に同アカデミーの Sitzungsberichte 中口發表される豫定になっている (Bayerische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse, Sitzungsberichte, Jahrgang 1956 Helt 12, 10—11)° Döigert が指摘するところの「一方において自己の所有地をもつ自由農民であるとともに、他方において所領農民としての性格をも兼ねていた *propratacti* とする

- (5) Libanius, *Discours sur les patronages*. Text traduit, annoté et commenté par L. Harmand. Publication de la Faculté des Lettres de l'Université de Clermont. 2^e Série, Fasc. 1, Paris, Presses Universitaires de France 1955. 210 S. 1 Bl. 44 # 1d., *Le Patronage sur les collectivités publiques des origines au Bas-Empire. Un aspect de la vie politique et sociale du monde romain*. Publications de la Faculté des Lettres de Clermont-Ferrand, fasc. 11. 東京の世田谷区
(5) P. Petit, *Libanius et la vie municipale à Antioche au I^{er} siècle après J.—C.* Paris, P. Geuthner 1955. 446 S. 4^o.
- (5) G. Tchalenko, *Villages antiques de la Syrie du Nord. Le massif du Belû à l'époque romaine*. I. II. [Institut Français d'Archéologie de Beyrouth. Bibliothèque Archéologique. 50.] Paris, P. Geuthner 1953. XV S., 1 Bl. 442 S., 2 Bl.—3 Bl., 16 S., 1 Bl., CCXXII Taf. なき同書第三卷は索引、地圖、圖表に豫定のなりふ
な。